The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本にルーツを持つタイの若者の自己形成過程に関する一研究 : 他者との関係性が与える影響に注目して
Author(s)	松岡, 里奈
Citation	日本語・日本文化研究. 2016, 26, p. 227-238
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/59673
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本にルーツを持つタイの若者の自己形成過程に関する一研究
—他者との関係性が与える影響に注目して—

松岡　里奈

1. はじめに

現在、国外の高等教育機関における日本語のクラスには、「外国語」として日本語を学ぶ学習者ばかりでなく、「継承語」（親から継承する言語）（中島 2010）として日本語を学ぶ学習者がいる（Yoshimitsu 2008 他）。タイの私立 X 大学の日本語主専攻のクラスも同様で、各学年に 2〜5 名、3〜10%程度の割合で、継承語として日本語を学ぶ「日本にルーツを持つ学生」[1]が在籍している。彼らは生育環境も様々で、大学に至るまで経てきた学校選択も異なり、タイ語と日本語の言語能力も様々であった。彼らはなぜタイの大学で、なぜ専門で日本語を学ぶのかという問題意識のもとにインタビュー調査を行ったところ、ある学生の語りの中で、周囲にいる他者との関係性が自身の自己形成に大きく影響を与えている可能性が見られた。そこで本稿では、第 1 回調査当時 4 年生のトシ（仮名）を対象に、彼の自己形成の過程を、周囲にいる他者との関係性に注目して、彼のライフストーリーを通じて考察を試みる。自己形成の過程の中で、彼にとって他者とはどのような存在だったのか、「日本」がどのように関わってきたのかを彼の語りから探っていくとともに、周囲にいた他者を可視化するために書いてもらった「人間関係マップ」（詳細は後述）も併せて考察を行う。

2. 先行研究

尾関・川上（2010）は、複数言語環境で育った大学生を対象に、半構造化インタビューを行い、複数言語をどのように習得したのか、また複数言語能力についての認識はどのようなものであるかを、彼らの語りを通して考察した。その中で、当事者の自己形成には、他者との関係性から醸成される「主観的な言語能力意識」（p.90）が大きく影響を及ぼしている可能性を示した。しかし、当事者の自己形成を支えるのは言語能力に関する意識のみであるとは考えにくいため、他の観点からも考察をする必要がある。

また、尾関（2013）は、成長・発達といった長期的な視野から子どもたちのことばの学びを捉えるために、昔、子どもだった若者たちのライフストーリーに注目している。その中で、「大人の都合」（p.125）で移動してきた子どもにとっての日本語使用経験や日本語学習がどのような意味を持ってきたのかを周囲の他者との関係づくりの過程に注目して考察をしており、自己形成の重要な支えとなる他者に関して、「関係を築くのは誰でもいいわけではなく、自分の思いや考えを受け止めてくれる相手であることが重要」(p.161)であり、さらにその他者とは「継続的な関係性が求められている」と指摘している。

しかし、どちらの先行研究も本稿のように自己形成の過程を積極的に追ったものではな

い。自己形成に影響を与えた他者に注目して考察を行うことで、複数言語環境を生きる子どもを支える教育支援を考える一助とする。また、先行研究における対象者は幼稚園から大学までのいずれかの段階で、日本の学校を経験している。しかし、本稿は、2 歳でタイ人の母親とともに日本を離れ、タイで幼稚園から大学までを過ごし、大学卒業後、自らの意志で日本へ移住を決意した若者を対象とすることから、日本への移動の時期、移動の理由が先行研究の対象者とは異なるという点からも考察の意義があると考える。

3. 調査概要

3.1 調査協力者のプロフィール

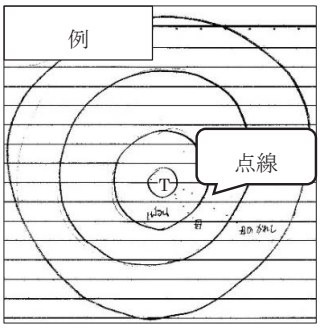
本稿の調査協力者であるトシは、日本人の父とタイ人の母を持つ大学 4 年生（2016 年 3 月第 1 回調査当時）で、兄弟はいない。日本で生まれ、2 歳でタイへ移動し、幼稚園から大学までタイの現地校で教育を受けた。日本語を学校で学んだのは、大学の 4 年間のみである。2016 年 5 月[2]に大学を卒業し、その後、日本で仕事を探すと心に決め来日し、アルバイトをしながら日本で一人暮らしをしている。

3.2 調査方法

調査は計 2 回行った。自己形成の過程を探るためには、まず彼の人生を捉える必要がある。本稿では、当事者が自身の人生について、何を語ったか、いかに語ったかに注目することで、当事者による経験の意味づけを、当事者の語りを聞くことで明らかにしていくライフストーリー研究（桜井・小林 2005）がふさわしいと考え、第 1 回の調査ではライフストーリー・インタビューを行った。インタビューの目的を伝えた後、「あなたが生まれてから今日まであった楽しかったことや辛かったことを、また具体的に覚えているエピソードもあればそれも含めて、自由に話してください」と導入質問をし、インタビューを始めた。インタビューは、2016 年 3 月にタイの X 大学近くの喫茶店で行われ、時間は約 1 時間だった。使用言語はトシと筆者の間のいつものコミュニケーションと同じく日本語だった。筆者とトシは 2 年間教師と学生として接し、それだけではなく本人から就職の相談を聞くほどに親しい関係性があり、ラポールが形成された状態で調査を行ったが、一方で、同じ機関に所属する教師と学生という関係が影響し、打ち明けられない悩みがある可能性、教師からの評価を気にした発言をしてしまうという負の可能性も考慮しておかなければならない。

また、第 2 回インタビューはトシが卒業し、日本へやってきて約 1 か月経ち生活が落ちついた 2016 年 8 月に、喫茶店で約 3 時間にわたり、フォローアップインタビューと半構造化インタビュー、「人間関係マップ」作成を行った。半構造化インタビューでは主に、①学校選択②家庭内言語・環境③周囲の人々との関係④自身の複数言語能力について語ってもらった。④に関しては、欧州評議会「ヨーロッパ共通参照枠」（Common European Framework of Reference for Languages: 以下 CEFR）の日本語翻訳版である吉島・大橋（2004）の自己評

価表を、タイ語母語話者の協力を得てタイ語翻訳を行い、タイ語翻訳版を使用し、タイ語と日本語の「読むこと」「聞くこと」「表現」「やりとり」「書くこと」の力の自己評価もしてもらった。また、「人間関係マップ」[3]というのは、三重の円を描き、一番中心に自分、その一つ外の円には毎日会う人間、もう一つ外の円は一週間に一度程度会う人間、一番外の円は一か月に一度程度会う人間だと仮定して、周囲にいた人の名前やグループを書いてもらったものである。それに加え、その人間との心のつながりを線の種類（実線・点線など）、太さ、また点線の際には、点の幅で表現してもらった。例となるマップを見せ、それを参考に筆者が描き方を説明してから作成に入った。計 2 回のインタビューは協力者の許可を取った上で録音し、文字化した。文字化した全てのデータと「人間関係マップ」、及びフィールドノーツを分析の対象とする。



3.3　分析方法

分析の方法は、尾関（2013）にならい以下の通りに行った。

（1a）全ての文字化したデータを、Excel でコーディングし、やりとりにテーマをつける。データとテーマを併せたユニットをカードにし、そのカード同士の関連性を探る。さらに大きなユニットに分け、ユニットを相互に比較する。

（1b）言語・家族・周囲の人間・学校・自分に関する出来事を時系列に並べ直し、通時的にその当時の経験に関する思いを捉える。

（2）1a と 1b、それに「人間関係マップ」を併せ、他者との関係性に焦点を絞り、自己形成の過程を追う。

4.　分析と考察

彼の経験を通時的に並べ直し、それに「人間関係マップ」を併せて分析した結果、トシのライフストーリーは 4 つの期間に分けて追っていくことが可能だと考えた。この 4 つの期間というのは、語りから見えた彼自身の物理的な居場所の変化と意識の変化に注目して分けたもので、「漂流期」「沈滞期」「変化期」「前進期」とラベルを付けた。表 1 にはそれを、実際の年齢と学校の変遷を併せて示した。

表 1　学校の変遷と 4 つの期間

生まれ (0〜2 歳)	幼稚園 (3〜6 歳)	小学校 (6〜12 歳)	中学校 (12〜15 歳)	高校 (15〜18 歳)	大学 (18〜22 歳)	2016 年 8 月(23 歳)
日本	タイ 公立幼稚園	タイ 公立小学校	タイ 全寮制中学	タイ IT 専門学校	タイ X 大学日本語学科	日本 アルバイト（就職活動）
	漂流期	沈滞期	変化期		前進期	

第 2 回インタビューの 2016 年 8 月当時、場所を日本に移し、④の前進期にいた彼が行った、CEFR を使用したタイ語と日本語の言語能力の自己評価の結果を、表 2 にまとめた。

表 2　トシのタイ語と日本語の自己評価

	聞くこと	読むこと	やりとり	表現	書くこと
タイ語	C2	C2	C2	C2	C2
日本語	B1	B1	B2	B2	B1

紙幅の都合上、自己評価の際の一部のデータ（「表現」の力の評価のみ）を以下に示す。

2＝第 2 回調査、T＝トシ、＊＝筆者、数字＝通し番号
【「表現」の力の評価】
2T1285：日本語はこれ（B2）。
2＊1286：これ。なんでこっち（C1）にならない？
2T1287：うーーん、なんか、**もうちょっと**かな。
2＊1288：もうちょっと。できそうな気がする？
2T1289：**まだ。今はまだ。**
2＊1290：これからはできるようになる。
2T1291：そうそう。
＜中略：これから出会い続ける人々との会話が理解できるまで頑張れる＞
2T1297：タイ語はここ（C2）。**タイ語能力自信あります。**あると思う。

自分の現在の日本語の能力では達成できないことに関して、「できない」という表現は使わず、「もうちょっと」（2T1287）、「まだ。今はまだ。」（2T1289）と今は発展途上にあると表現し、肯定的な表現で評価をした。一方で、データ提示は省略したが、B1 と評価した日本語の書く能力に関しては、笑いながら「2T1299：書くは少ない。」と漢字への苦手意識から否定的な評価を示したが、漢字能力を別にして評価をし直すと、一つ上の指標の B2 に相当する力を使って現在仕事をしているところだ（2T1305）と、日本語を書く能力の伸長への期待を窺わせた。また、彼はタイ語の能力に関しては、全て最高の C2 の評価をした。それについて彼は「2T1297：タイ語能力、自信があります。」と揺るぎのない自信を示した。このように前進期にいる彼の語りからは、現在の言語能力への自信や、これからの自身の成長に期待している様子が見られた。では、前進期のこの肯定的な意識に至るまでの自己形成過程を、彼のライフストーリーを通して、他者との関係性に注目しながら探っていく。

4.1　漂流期

この漂流期はトシの 2 歳から小学校入学までの時期を指す。トシが 2 歳まで滞在した日本では、母親は家を空けることが多く、主たる養育者は日本人の父親だった。その後 2 歳の時に母親の在留資格の問題で母親とともに日本からタイへ移動することになり、父親とは離れた。タイへ来てから、トシは小学校入学まで親戚または知り合い宅に預けられ、約 3 年の間で 3 軒の家を渡り歩いたが、その時のことはあまり覚えておらず、その理由について次のように語った。

2T114：子どもだから、なんか一色々バタバタしてて、わかんないじゃないですか。急に連れて行ってー、急に知らない人と住んでてー。
2＊115：その知らない人ってお母さん？
2T116：あー親戚さん。お母さんの親戚。
2＊117：あー色々移動してたからね。じゃあなんで移動してたことは覚えてるけど、その時どう思ってたかは覚えてないの？
2T118：**なんも考えてないかなーって。**
2＊119：もうねー大変だったもんね。バタバターって。あっちこっち。
2T120：もうめんどくさいかな。
2＊121：なにが？
2T122：なんか、一年このおばあちゃんといて、でもう一年、その一年後、もう一つの親戚にいて、なんか考えるのめんどくさいじゃないですか。だからーいいじゃん、**どこでもいいじゃん**って感じ。

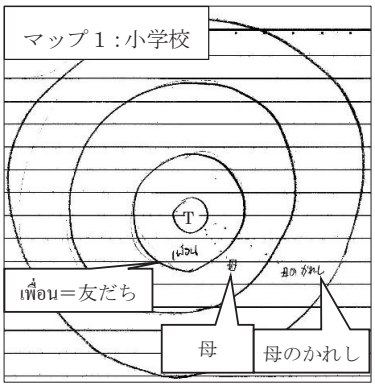
彼は「2T118：何も考えてない」、「2T122：どこでもいいじゃん」と当時の気持ちを語った。しかし、この漂流期の自分の気持ちを覚えていないとは言うものの、預けられた先の家族が温かく歓迎してくれたことは覚えているようだ。

2＊640：へーーいい人たちだったんだね。みんな？
2T641：うん、そう。**お母さんより好き。**
＜中略：トシは現在は預けられた先々の家族とは関わりがない＞
2＊646：好きだったのに？
2T647：たぶん。**お母さんよりは。**
2＊648：あーそう。じゃあそのとき、お母さんは全然いなかったけど、気持ちは落ち着いてたんだ。
2T649：うん。

彼は母親を引き合いに出し、当時の預けられた先々の家族のことを「2T641：お母さんより好き。」と述べ、好意的な印象を語った。しかし、この漂流期は彼にとっては約 20 年も前のことで、当時の記憶が薄れたのか、または当時の自分の気持ちを正確に言語化できなかったのか、このときそれを言いたくなかったのか不明であるが、これ以上語りを引き出すことは難しく、漂流期の考察には限界がある。

4.2. 沈滞期

この沈滞期は小学校入学から中学 1 年生までの時期を指す。彼はマップ 1 内に、毎日会う人間として一番内側の円に「友だち（เพื่อน）」と記した。筆者は、「2＊203：あー友達の名前でもいいよ。」と加えたのだが、彼は「2T204：覚えてないです。ハハハ」と語った。約 10 年前とはいえ、小学校当時一番仲の良かった友だちの名前を覚えていないことに疑問を感じた筆者は、もう一度彼に尋ねた。



2＊747：じゃあ小学校時代に友達と遊んだことは遊んでたんだよね。
2T748：遊んでたと思うけど、**あんまりそんなにわかんない。**
2＊749：なんでそんなにわかんないんだろう。
2T750：・・すぐ忘れる。
2＊751：なんで？
2T752：**そんなに仲良くではないかなーって感じ。**
2＊753：そうなの？
2T754：**だって仲良くなったら色々覚えてるじゃないですか。（笑いながら）で、めんどくさいだったらすぐ忘れるんですよ。**
※（　）は語りの様子を示す

当時、友だちと遊んだという事実は覚えているが、名前を覚えておけるほど仲良くはなかったようだ。それはマップ 1 上の「友だち」との間に線が引かれていないことからも分かる。

また、家庭環境でいえば、小学生になりトシは母親とともにアパートの一室に移り住んだが、母親とは仲が良くなかったと言い、その理由として以下のように述べた。

1T80：なんか、そんなに一緒にいてないから、急に二人暮らしはちょっとー
1＊81：あーーー
1T82：ちょっとー**いやな気持ち**？フッ

小学校に入るまで、彼は母親と生活を共にした実感はなく、突然の二人暮らしに動揺したようだ。しかし、実際は新しい生活を母と二人で迎えたわけではなく、母親のタイ人の恋人も一緒だったようだ。その様子を見て彼は当時を振り返りこう語った。

1＊89：三人になったのか。二人じゃないんだ。
1T90：でー、**自分から見てる立場はー、俺より、そっちのほうが好きじゃない？ハハハ**

その当時彼はその恋人に対して嫉妬のような感情を抱いていたようだ。また、母親は家事一切を小学生だった彼に任せて外を出歩き、それにも不満を感じていた彼は家の中で母親を避けるようになった。幼少期に母親と話した記憶はあるかと尋ねると、このように答えた。

2T130：小学生の時。ただ、文句言うだけ。
2＊131：え、自分が？
2T132：ううん、お母さんから**文句言われただけ**。

その当時の母親から発される言葉は、トシへの家事の指示・命令・文句（2T235：「「出てこい！」とかそういう。「掃除しろ！」とか。」）だったようだ。マップ 1 上では、「母」は週に一度、「母のかれし」（トシの記述ママ）は月に 1 度会う関係で、心のつながりは幅の広い点線で表されている。沈滞期にいる彼は、周囲に心を深く通い合わせる家族、友人がおらず、誰と関わり合うこともなく生きてきたようだ。その後、中学進学と共に彼は母親と離れる決心をし、全寮制の中学へ自らの意志で進学した。しかし、学校内でもまた心を開ける友人を得ることはできないままいじめにあってしまった。

1T196：でーそこはー、いじめられた人はー・・自分。
＜中略：いじめの原因について＞
1T208：そんなかんじ。とかーあのー、**お金盗むことも**。
＜中略：お金盗難事件が起こり、自分が疑われた＞
1T219：だからー、お前でしょ、お前でしょ、周りから。ってかんじ。でー、**先生がー、お前でしょー、言って、とか、嘘つかないで、とか。何にもしてないのに**。
1＊220：その時どうしたの？
1T221：じゃあ、はい、ぼくです。って感じ。めんどくさいから。

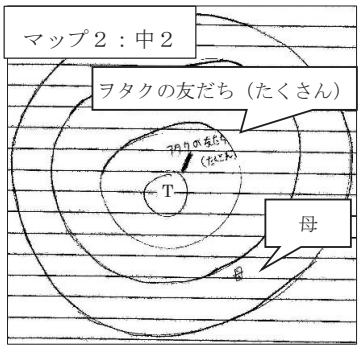
お金泥棒の犯人にされて、教師も自分を信じてくれず、してもいない罪を認めるしかなかったと言う。つまり、沈滞期には、彼の自己形成にプラスの働きかけをした他者は存在しなかった。学校の友人も、教師も、母親も、誰も彼の自己形成に肯定的な影響を与えていなかった。漂流期の語りと比べると、この沈滞期における周囲の他者に対する語りは全て悲観的なもので、沈滞期において彼の肯定的な自己形成を推し進める他者は存在した形跡はない。

4.3. 変化期

変化期は中学 2 年生から高校 3 年生までの時期を指す。全寮制中学でいじめにあい、図書館へ逃げ込む生活の中、中学 2 年時から彼は、インターネットで日本のアニメを見始めた。そこからアニメの世界にはまり、アニメが好きな仲間をネット上で探した。

1T368：えーなんかー中学の時がー、そっからアニメとか見てるじゃないですか。
1＊369：あーー 1 人でアニメ見るようになったんだ。
1T370：日本の。でー、集まるサイトあるじゃん。あのーオタクのアニメたち。
1＊371：あーありますねー。
1T372：でー、**そっからー話して、話してー、でー、ミーティング**とかあるじゃないですか。
＜中略：タイのサイトかどうかの確認＞
1T376：そう。でー、**一緒にご飯行こう、話しようー**そんな感じ。
1＊377：うんうん。
1T378：でー、あの人たち、めっちゃ仲良くてー、今でも仲良くなってる。

この変化期には、他者との関係づくりに対する彼の積極的な働きかけが見られる（1T372、1T376）。この積極性は沈滞期における彼の語りからは見られなかった。つまり、ここに他者との関係性に対する姿勢の変化が見られる。「日本」のアニメという共通の趣味がつなぐ仲間との関係性が、彼の他者との関係づくりへの意識に変化を与えたのではないだろうか。そして、彼は学校生活よりも、母親のいる自宅よりも、この日本のアニメを愛好するタイ人の「ヲタクの友だち」（トシの記述ママ）と過ごす環境にこそ、自分の居場所があると感じるようになった。

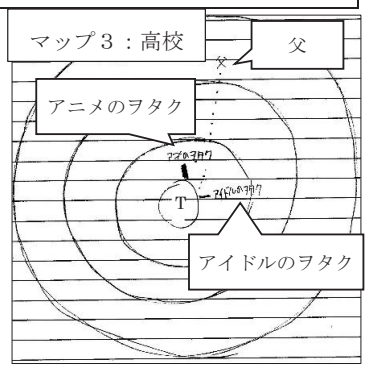


1＊385：あーじゃあ中学校の時も、学校でいやなことがあってもー
1T386：あの人たちにー、普通の好きなこと言ってー、もう、全然、こっちでいい。
1＊387：あーーー
1T388：あのー**自分でいられる場所**。みたいな感じ。

彼はこの「ヲタク」との関係を「自分でいられる場所」（1T388）と表現した。第二言語としての日本語の習得に関して、ことばやコミュニケーションの役割の面から考察した細川（2002）では「社会としてのコミュニティの中で自己の居場所を求めることこそ人間として本来的な姿に他ならない」（p.134）と主張している。トシも社会（ここでは家庭や学校）の中で、自己の居場所を求め続けていたのではないだろうか。そしてようやく、日本のアニメ好きのタイの「ヲタクの友だち」とのコミュニティの中で「自分でいられる場所」を見つけることができたのだろう。尾関（2013）でも「自分らしくいられる場」（p.143）である他者との関係性の中で、当事者が自信をつけていった様子が観察されている。本稿でも、マップ 2 上の「ヲタクの友だち」との心の線が、これまでになく太く、濃くつながれており、「ヲタク」仲間は彼にとって初めての信頼のおける他者だったことが分かる。日本のアニメを愛好するタイの「ヲタク」仲間は、彼の現在の前進期における肯定的な自己意識の形成に、大きく影響を与えた他者の内の一人だったのではないだろうか。しかし、一方で月に一度寮から自宅へ戻るという規則があったため、マップ 2 の月に一度の円内に「母」が表れているが、心の線は描かれていない。彼は、この時の母親との関係を、「2T273：すっごい嫌い期間。

ハハハ」と述べ、関係の悪化を示唆した。その後、彼は中学を卒業し、高校入学までの休みを利用し、記憶している限りで初めて日本を訪れ、父親のもとで二か月過ごした。その間、タイにいた母親が借金返済のために自宅を売却し、トシはタイに住む家がなくなった。

1T289：でー、あのータイ帰るとき、お母さんから、家売ったっとか。だから、お前友だちの部屋住んでね、とか。
1＊290：・・はーー。
1T291：だから、**ほんとにムカつきすぎて、もう、いない。だから、そっから、お母さんと、もう関係ない。別れたって感じ。**



トシはついに我慢の限界を超え、母親との縁を切った。タイに戻ってからは、アパートで一人暮らしを始めた。一人で生きていくためにはアルバイトをしなければならず、高校は勉強の楽な専門学校を選んだ。しかし、学内やアルバイト先では、積極的に他者と関わろうとしなかったようだ。マップ 3 には学内・バイト先の人間は記されていない。しかし、相変わらず「アニメのヲタク」との関係は続き、マップ 3 では、「アニメのヲタク」との心のつながりはマップ 2 より太く濃い線となり、その関係はより強固なものとなったようだ。さらに、マップ 2 では見られなかった「父」と「アイドルのヲタク」だが、父親とは高校時代から直接連絡がとれるようになり、学費と毎月の生活費を援助してもらっていたようだ。また、マップ 3 から出現する「アイドルのヲタク」との関係は、高校入学前の日本滞在中に、テレビで偶然見かけたアイドルの握手会に興味を持ち、一人で会場まで行ったことから始まっている。

1T418：そう。でー行ってー、握手会行ってー、その時はー、あんまり日本語出来なくてー「タイから来ましたー、でー、応援してまーす」（笑いながら）そんな感じ。
1＊419：うんうん。
1T420：なんかそっちも、けっこう、自分でアピールじゃないですか。「えーそうですかー？えーじゃあ**また来てねー！**」とかそういうのあるじゃん。
1＊421：うんうん。
1T422：でー、ちょっと**小さな幸せ**って感じ。アハハ
1＊423：アッハッハッハッハッハ
1T424：なんかーそっちからただのオタクかなーって感じだけど、自分から行ってー、なんかー、えーー↑楽しくなるんですよ↑かわいいー好きな子とか話せるのいいなー。でー、**もっと話したい↑って感じがあってー、でー、タイ帰ったらー、日本の、日本語の本買ってー、自習する**。

※「↑」は興奮気味に話している様子を表す

彼は、握手会で日本のアイドルに「また来てねー！」（1T420）などと声をかけられたことによって、アイドルのファンの世界に、自身の存在価値を感じたのだろう。彼は「小さな幸せ」（1T422）を感じ、アイドルの世界に夢中になり、日本のアイドルと話すために日本語を独学で学び始めた。そしてまた高校 2 年の時に日本へ行き、アイドルのイベントに参加し、その日本人参加者の「ヲタク」に、独学中の日本語で積極的に話しかけた。

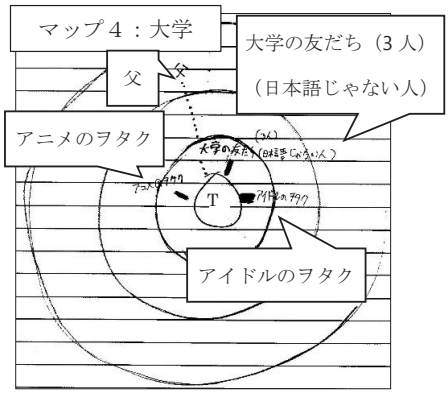
1T440：＜中略：アイドルに覚えてもらえて嬉しくて日本語の勉強がはかどる＞日本の人と会った時も、なんか、なんだっけ、**正しいかわからないけど、とりあえず言ってみて**って感じ。
1＊441：え、どこで日本の人と会ったの？
1T442：いろいろ。普通のイベントとか。**日本人会ったら、あのー急に、こんにちはとか言っちゃうんすよ。（笑いながら）**

変化期にある高校時代は他者との関係づくりへの意識変化の過渡期にあったのではないだろうか。学内やバイト先では、全く他者と関係を持とうとせず、その一方ではアイドルのイベントに来ている日本人の「ヲタク」には独学中の日本語で話しかけ、関係を作ろうとしている。他者との関係作りへの積極性が窺える。つまり、この変化期の終盤には、トシは「タイ」の世界と「日本」の世界で全く違う一面を見せている。そして、1T442 の語りに対し、筆者は沈滞期のトシの他者への姿勢との違いについて、このように質問した。

1＊449：うんうんうん。それさー中学の時の学校の中の T とは全然違うよね。
1T450：そう。全然変わってるんですよ。**中と高は、ほんとになんか、一人来てから本当に幸せ**。もうー・・・幸せ。もう一**解放**したって感じ。ハハハハハ

1T450 の「中と高は」という語りから、中学生時代からの自身の変化に気づいていることが分かる。つまり、母親のもとから離れ、全寮制学校に入ったことが一つのきっかけとなり、さらに日本の「アニメのヲタク」と出会ったこと、そしてそこに日本のアイドルと、日本人の「アイドルのヲタク」との関係も加わり、他者との関係作りに対する意識の変化につながったのだと考えられる。したがって、変化期におけるこれらの人々が、彼の肯定的な自己形成の一因となったのではないだろうか。彼はこの変化期で、「解放」（1T450）され、新たな自己を見つけ、自己形成の再出発を遂げたのではないかと考えられる。

4.4. 前進期



この期間は大学入学から第 2 回調査時（2016 年 8 月）までを指す。高校時代、アルバイト生活で勉強どころではなかったため、大学は入試が必要でない私立 X 大学に入学した。X 大学の日本語学科は未習者を対象に開講されているため、日本語が好きで独学していた日本語を一から学び直したいと思い日本語学科に入学した。日本好きの同級生との出会いにも期待したが、日本語学科では彼と同じように日本に興味のある学生に出会うことはできなかった。その代わりに、気の合う仲間は他の学科で見つけることができたようだ（マップ 4「大学の友だち(3 人)(日本語じゃない人)」）。また、日本のアイドルに会いに行くためバイト代を貯め、年に 1 回以上日本を訪れた。その頃から彼は、知名度の高いアイドルではなく、徐々に知名度の低いアイドルを追うようになった。それはアイドル「ヲタク」の世界に自らの存在価値をより強く求めるようになっていたからなのではないだろうか。

1＊591：あーー↑知名度が低いから、アイドルがいても見てる人は 30 人だけ。
1T592：そうそう。でー握手会の時、タイから来ましたよ、って言ったら、みんなびっくりする。知名度低いのに、タイから来る。そっからー、**結構その人たちに、タイから来ましたなんですか？とかそんな感じ。**でー、ちょっと仲良くなってー、でー、**日本の友だち増えたなーって感じ**。
＜中略：SNS 上でアイドル情報収集を始めたりバイト代を貯めて日本に年に何度も行くようになった＞
1T600：ハハハ。でーどんどん仲間増えて増えて—増えてー、**今はなんか普通に行っても、泊まれる人もいる。**

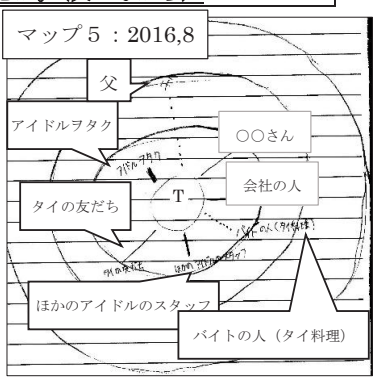
知名度の低いアイドルの握手会やイベントでは、「ヲタク」の人数も少ないため、アイドルだけでなく「ヲタク」同士の交流もあり、タイから来た珍しい「ヲタク」である彼に周囲も関心を抱き、彼に日本人の「アイドルのヲタク」の仲間が増えることとなった。その「ヲタク」仲間との親しさを語り、マップ 4 上でも「アイドルのヲタク」とつながれた線はこれまでで一番太くて濃い線で描かれた。この「アイドルのヲタク」が彼の肯定的な自己形成に最も貢献した可能性が窺える。また、前進期には、大学の日本語学科の後輩やタイ人の「アイドルのヲタク」から日本語からタイ語への翻訳を頼まれるようになっていた。

1T814：でー、しかもみんな最近、**後輩でも**、ずっと 1 年生でも 2 年生でも 3 年生でも、フェイスブックのメッセージが日本語。
1＊815：うん。
1T816：でー、**翻訳してーお願い**とか、ハハハ言っちゃうんですよ。
＜中略：聞かれた時の対応について＞
1＊823：へーーーー。後輩から頼りにされてるんだね。
1T824：多いですよ。後輩じゃなくてー、**他のヲタクでも。**

自身の言語能力が誰かの役に立つ経験をしたということが、前進期の言語能力の自己評価で見られた自信につながっている可能性が見られる。また、大学を卒業後、彼は日本での就職を目的に日本に移住した。来日し生活費を稼ぐため、3 種類のアルバイトを掛け持ちした。その一つが新規開店するタイ料理店で、日本人オーナーからも信頼を置かれた。

2T1110：あとはータイ料理のお店さんが、すっごいなんかー**いっぱい働いてほしい**んですよ。最初は、シフト自由じゃないですか。今日のスケジュールによって考えるとか。でー店長さんとか**、いつも店長さんに通訳してるんですよ。**募集したとき、面接のときもいっぱい話して、**でー1 日 7 時間 8 時間働いてくんないかなーとか。（笑いながら）**
＜中略：他のバイトもあるから断っていて、後輩のタイの子を紹介したらどうかと筆者が提案＞
2T1114：はい。たまには急に連絡来て、**この人に電話してくんない？とか。（笑いながら）**

このように後輩や日本のバイト先で頼られている様子を、笑いながら筆者に説明している。他者から頼られ、自身の存在が役に立ち、存在を有り難がられるという経験が彼の肯定的な自己形成につながっているのではないだろうか。また、タイ料理店のバイトだけでなく、学生時代のヲタク活動時に培った人脈を活かし 2 社のアイドル関係の会社でも、働いている。マップ 5 を見てもわかる通り、彼の周囲にはこれまでで最も多くの人が表れている。それぞれ、線でしっかりと結ばれたグループ、固有名詞で書かれる人も出てきた。充実した日本生活を送っていることが窺える。現在の肯定意識には、彼の周囲を取り囲む多くの人間の支えが関係しているのではないだろうか。彼はこれまでの人生を振り返りこう語った。



2T1622：いやーなんかー・・**色々経験があるから、いろんなあわないと、大人になれないかなって感じ。**いっぱいあってて、悪いことあっても、いいことあってもいいじゃん。ってかんじ。成長していく。
＜中略：自分と同じ背景の子どもには自信を持って、自分の意志を大切にしてほしい＞
2＊1627：**いつから自信をもつようになった？**
2T1628：**大学入ったとき。**
2＊1629：どうして？

2T1630：	高校生のときが、ずっと一人いるんですよ。一人暮らしでしょ。ずっと 3 年間バイトもやってて、色んなバイトもやってててー、他の人ってさ、周り見て、仕事もやったことのない人もいるし、バイトとかしないのにずっと親にお金もらってててー自慢する人もあったしーそういう環境も多いから、自分こんなにやってたから、そこが、長所。だと思う。

これまでの人生の全てを経験として受け止めれば、大人になれると語る。辛かった経験をしたことも、自身の強みだと捉えている。彼の現在（2016 年 8 月）の肯定意識は、言語能力の自己評価時の語りだけでなく、自らの人生を振り返ったこの語りにも見られる。この肯定意識にはやはり、2T1628 で大学入学時から自信を持つようになったと語っているように、マップ 4 で一番太く濃い線で結ばれている「アイドルのヲタク」が最も影響を与えている可能性がある。彼にとって、「アイドルのヲタク」というのは、周囲に心が通い合える人間がいなかった辛い時代から自らを救ってくれた、タイではない、別の世界である「日本」へ導いてくれた恩人のような存在なのではないだろうか。また、ただ共通の「趣味」というわけではなく、半永久的にアイドルを愛し続けると信じ合うことができる関係性の「ヲタク」という揺るぎない仲間意識を持てる関係が、彼に絶対的な安心感を与え、自信を持つ勇気を生み、彼の肯定的な自己形成に影響を与えたのではないだろうか。

5. まとめと今後の課題

ここまでトシのライフストーリーを通して、現在の肯定的な意識に至るまでの自己形成過程を他者との関係性に注目して考察を試みた。彼の語りから、本稿が注目する他者との関係性というのは、他者なら誰でも良いわけではないことが明らかになった。これは尾関（2013）でも同様に指摘されているが、尾関では「自分の思いや考えを受け止めてくれる相手」であること、「継続的な関係性」であることが他者に必要な条件として述べられている。しかし、自己形成に影響を与える他者とは、それだけではない可能性が本稿の考察から考えられる。

まず、彼の自己形成過程に肯定的な影響を与えたのは全て、「タイ」ではなく「日本」に関わる人間であった。記憶にあまりない漂流期を除き、小学校に入学した沈滞期以降、「タイ」で彼の周囲にいる人間である、タイ人の母親、学校で出会う友人・教師、タイでのアルバイト先の人々については、全て否定的に語られ、周囲の他者と積極的に関係を持とうとする様子は見られなかった。一方で、変化期以降、「日本」が関係する世界であれば、タイ人であっても、大学の後輩との関係は笑いながら語ることができる関係であり、もちろん彼の他者との関係づくりの意識変化のきっかけを与えた「アニメのヲタク」とは、今でも付き合いのある良好な関係が続いている。そして大学入学以降の前進期でみられる、日本のアイドルや日本の「アイドルのヲタク」との出会いが、彼の将来設計に大きく影響を与え、日本へ移住するきっかけを作っていた。つまり、彼にとって「日本」とは、肯定的な自己形成が進む場として認識されていたのではないだろうか。彼の肯定的な自己形成に影響を与えた他者とは、否定的な意識のある「タイ」の世界から彼を連れ出し、彼に居場所を与えてくれた

「日本」社会とつないでくれる相手だったのだと考えられる。

またそれだけでなく、もっとも太く濃い線で結ばれた「アイドルのヲタク」と築いた関係性は、「趣味」を超えた、アイドルへの共通の愛で固く結ばれた、揺るぎない仲間意識に支えられ、「継続的な関係性が求められている」（尾関 2013,p.161）のではなく、関係性が半永久的に続いていくことが想像に難くないという関係性が、彼に安心感を与え、そのような信頼関係を築ける他者の存在が、彼の肯定的な自己形成の後押しをしていたのではないだろうか。最後に、複数言語環境に生きる子どもたちが肯定的に自己を形成していくためには、家庭や学校、日本語の支援教室に留まらず、子ども自身の興味に沿った世界へ、自ら足を進められるように支えることも周囲の支援者の役割だと言えるのではないだろうか。今後は他の視点からの考察も行い、複数言語環境にいる子どもの教育支援を考え続けていきたい。

参考文献

尾関史・川上郁雄（2010）「「移動する子ども」として成長した大学生の複数言語能力に関する語り―自らの言語能力をどう意識し、自己形成するのか―」細川英雄・西山教行編『複言語・複文化主義とは何か―ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ―』pp.80-92．くろしお出版

尾関史（2013）『子どもたちはいつ日本語を学ぶのか　複数言語環境を生きる子どもへの教育』ココ出版

桜井厚・小林多寿子（2005）『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房

中島和子編著（2010）『マルチリンガル教育への招待　言語資源としての外国人・日本人年少者』ひつじ書房

浜田麻里・林さと子・福永由佳・文野峯子・宮崎妙子（2006）「日本語学習者と学習環境の相互作用をめぐって」『日本語教育の新たな文脈－学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性』pp.67-102．アルク

細川英雄（2002）『日本語教育は何をめざすか―言語文化活動の理論と実践―』明石書店

Counsil of Europe(2001).*Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment.* Cambridge University Press.（吉島茂／大橋理枝（訳・編）（他）(2004)『外国語教育Ⅱ―外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠―』朝日出版社）

Yoshimitsu, K.(2008). *Japanese Language Socialisation of Second-generation Japanese in the Australian Academic Context.* Electronic Journal of Foreign Language Teaching, 5(Supple.1), pp.156-169. Singapore: Centre for Language Studies, National University of Singapore.

---

1 本稿では、片親が日本人である学生を指す。

2 タイの X 大学は、1 学期が 8～12 月、2 学期が 1～5 月の 2 学期制である。

3 浜田他（2006）の同心円図を参考に、本研究に沿って作り変えたもの。